

頸静脈超音波検査が診断の一助となった Lemierre 症候群の一例

◎宮川 大樹¹⁾、井上 歩¹⁾、園山 和代¹⁾、丸田 英里香¹⁾、森 恵里子¹⁾、本田 法子¹⁾、後藤 希¹⁾
京都市立病院¹⁾

【はじめに】Lemierre 症候群は、1936 年に咽頭痛後に嫌気性菌による菌血症をきたし内頸静脈内血栓と他臓器での多発性膿瘍の形成を伴った例を Lemierre らが報告したことから命名された感染症である。当時は致死率が約 90%と極めて高かったが、1960 年代に入り抗菌薬が使用されるようになると“forgotten disease”と言われるまで激減した。近年、耐性菌に対して抗菌薬の使用を制限する傾向から疾患頻度の増加が示唆されている。今回、頸静脈超音波検査が血栓の同定の一助となった患者の一例を経験したので報告する。

【症例】76 歳、男性【主訴】強い頸部痛、全身倦怠感

【入院時病歴】

既往歴に高血圧、高脂血症、痛風、頸部脊柱管狭窄症あり。強い頸部痛と全身倦怠感のため救急車にて他院へ搬送され、頸部膿瘍疑いで加療目的のため当院へ転院となった。来院時、体温は 39°C 程度、呼吸苦や上気道閉塞は認めなかったが頸部腫脹や右鼻腔内に濃性後鼻漏所見あり。

【検査所見】入院時血液検査では白血球、CRP、D-ダイマーの上昇を認め、血液培養検査では Streptococcus

intermedius が検出された。単純 CT 検査にて右後頸筋群を主とした頸部軟部、右耳下腺の腫脹、右耳下腺、右篩骨洞、右腸骨洞に炎症所見を認めた。また、造影 CT 検査にて内頸静脈血栓症が疑われたため頸静脈超音波検査を施行したところ、右頸部にリンパ節腫大が散見され、患者が痛みを強く訴える部分に一致して右内頸静脈に血栓を疑う構造物が確認された。

【考察】本例のように先行感染及び頸部痛がある患者においてスクリーニング的に頸静脈超音波検査を実施し、痛みに一致した部位での血栓の存在やリンパ節腫大、液体貯留所見等を確認することで潜在的な Lemierre 症候群患者を早期に発見することができるのではかと考える。また、CT 検査と異なり頸静脈超音波検査はベッドサイドで容易に検査を行うことができるため、繰り返し血栓増減の確認を行うことができる利点があり、肺血栓塞栓症の予防の一助になると考える。

連絡先：京都市立病院 臨床検査技術科
075-311-5311 (内線：2243)